

平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

大阪府立泉州救命救急センター 放射線科 西池成章

1. 参加した目的と達成度について

日本放射線技術学会平成 21 年度海外研修派遣にて、スタンフォード大学短期研修に参加する機会を得た。本研修ではスタンフォード大学における研究内容やその取り組み方、技術を学ぶとともに、自身の研究に対する方向性を見直したいという目的で参加させていただいた。一週間という限られた日程ではあったが、瞬く間に最終日を迎えた。大きく分けて、Cardiac Imaging, Neuroradiology, Molecular Imaging, Future of Radiology の研究動向や臨床技術について lecture を受けた。どれも exciting な内容だったが、発光酵素である Luciferase や Radionuclide などのラベルを用いた Molecular Imaging についての研究施設や研究内容には深い感銘を受けた。講師であった Sam Gambhir PhD が、“分子レベルの研究が進み、将来、病院と家庭のトイレがネットワークされる時代が来るかもしれない（トイレが尿中のがん生成物質を検出する）”と語っていたが、今後、医療における診断、治療の一翼を担っていく分野であるのは間違いないであろう。一方で、Cardiac CT の撮影技術や 3D Imaging については、日本でも活発な研究がされており、日本のレベルの高さをあらためて感じた。研修を通して、研究の根底にあるのは患者さんのためであるという考え方と、将来の構想・展望が明確であることが印象に残った。また、ともに参加した研修生との親睦は、今後の研究あり方についての方向性を見出す良い機会となり、大変満足のいく研修だった。

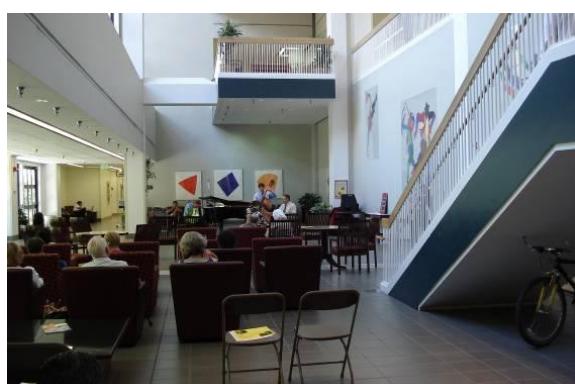
2. アメリカの放射線診療の利点と問題点について

放射線診療の枠組みの中で、モダリティごとにライセンスがあり、業務内容が明確に分かれているということを強く感じた。これは研究についても同様で、通常、一般撮影や CT 検査に携わっている技師は研究に関わることがないようである。ライセンスを所有することで、その分野の地位向上、教育、管理プログラムの整備につながっていく利点があり、日本のように扱う機器が多く、従事したい機器に必ずしも就けないことを考えるとよいシステムだと思った。また、他部門とのコミュニケーションがなく、マニュアルに沿った撮影に徹している点については、一概に問題とも言えないが、個人のスキルやモチベーションの向上に疑問が残った。

3. 今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすか

今回、最先端といわれる研究、技術を学べる機会に恵まれ、医療人として視野を広げる良い機会になったことは間違いない。加えて、全国から集まった素晴らしい仲間たちと交流が持てたことは、自身を見つめ直し、エネルギーをいただいた貴重な時間であり、これから大きな力になることと思う。今後、研修で得たものをより多く患者さんに還元できるよう業務や研究に努めていきたい。

最後に、このような機会を与えていただいた日本放射線技術学会の関係者の方々、スタンフォード大学の皆様、研修中大変お世話になりました GE Healthcare の皆様、広島大学の木口団長、そして、本研修に参加することを快く承諾していただいた坂下恵治技師長をはじめとする大阪府立泉州救命救急センター放射線科諸兄に深く感謝いたします。



STANFORD HOSPITAL&CLINICS内
患者サービスの一環として音楽の生演奏を行っていた(Cancer Centerでも行われていた)。